書評

リチャード・オヴェンデン 著、五十嵐加奈子 訳『攻撃される知識の歴史―なぜ図書館とアーカイブは破壊され続けるのか―』

Richard Ovenden,
"Burning the Books: A History of Knowledge Under Attack"

柏書房/2022年4月/
四六判/392頁/
定価 3,000円＋税

石田 朋生
Tomoo Ishida

1　はじめに

本書は、2020年にイギリスの老舗出版社ジョン・マレーから刊行されたRichard Ovenden , *Burning the Books: A History of Knowledge Under Attack*の全訳である。図書館や公文書館、またその収蔵対象となる書物や文書が被ってきた破壊の歴史と、それに対する抵抗の歴史を辿る力作となっている。また、全14章に及ぶ各章で扱われる事例は現代社会における知識の破壊からデジタル情報の保存上の課題にまで及び、そこから得られた教訓の数々が章ごとに示されている。本書は、これらの記述を通して図書館やアーカイブズが担ってきた社会的機能の実態に迫るとともに、その必要性を強く訴えるものである。

著者のリチャード・オヴェンデンは、本書でも登場するオックスフォード大学ボドリアン図書館の25代目館長を2014年から務めている。同氏は図書館・書物・写真の歴史について執筆しており、代表的著作にはスコットランドの写真家についての研究書である*John Thomson (1837–1921): photographer*（1997）などがある。また、2009年から2013年までデジタル保存連合（DPC）の議長を務めた[1)]。

本書を評するにあたり、本文から引用した表現は鉤括弧で示し、他のウェブサイト等から引用した情報については註釈で示した。また、「アーカイブ」と「アーカイブズ」の使い分けについては、引用部分および日本語訳として定着していると思われる部分を除き「アーカイブズ」と単複同形で示した。

1――Balliol College, University of Oxford "Richard Ovenden"（https://www.balliol.ox.ac.uk/richard-ovenden-0, 最終アクセス日：2023/12/18）

2　本書の構成

はじめに
第１章　土に埋もれた粘土板のかけら
第２章　焚きつけにされたパピルス
第３章　本が二束三文で売られたころ
第４章　学問を救う箱舟
第５章　征服者の戦利品
第６章　守られなかったカフカの遺志
第７章　二度焼かれた図書館
第８章　紙部隊
第９章　読まずに燃やして
第10章　降り注ぐ砲弾
第11章　帝国の炎
第12章　アーカイブへの執着
第13章　デジタル情報の氾濫
第14章　楽園は失われたのか？
結び　　図書館や公文書館はなぜ必要なのか

3　各章の内容

はじめに

まずページをめくると、焚火を囲む人々を写した写真が目に入る。1933年５月10日の晩、ベルリンでナチスによって行われた焚書の様子である[2)]。「知識への攻撃」として、最も有名な事件の一つだ。「知識への攻撃」は、歴史上繰り返され、今もなお続いている。

ここでは、全体の概説と本書の目的について述べられている。その目的とは、図書館やアーカイブズの破壊の歴史を記述することに加え、それに対するライブラリアンやアーキビストの抵抗を明るみに出すことにあるとする。

第1章　土に埋もれた粘土板のかけら

本章では、アッシュルバニパルの図書館に保存されていたとされる粘土板に関する研究を辿りながら、古代世界における知識の収集と保存のあり方が論じられている。

ニネヴェの地で発見された大量の粘土板から、アッシリア王国において知識の保存と整理が体系的に行われていたことが明らかになった。粘土板の中には近隣諸国から奪取した

2――焚書の様子を記録した図や写真、映像は、たとえば以下のページでも見ることができる。 United States Holocaust Memorial Museum “BOOK BURNING”（https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/book-burning?series=198, 最終アクセス日：2023/12/18）

ものもあったという。また、この粘土板の研究を通じて、同図書館は知識を一つの場所に集約したおそらく史上初の試みであったことが明らかになった。

同章の最後に著者は、コレクションを形成した統治者には「知識の獲得が権力の拡大につながる」という考えがあったこと、また古代世界においてすでに後世に向けた知識の保存が行われていたことを指摘している。

第2章　焚きつけにされたパピルス

本章では、「西洋人が思い描く図書館の原型」であるアレクサンドリア図書館とその伝統を受け継いだ数々の図書館が登場する。ここでの伝統とは、アレクサンドリア図書館のムセイオンのように、図書館や公文書館が新たな知識が生まれる場所であることを意味する。

実際のところ、後世の図書館のあり方に大きな影響を与えたアレクサンドリア図書館の存在を示す証拠は未だ無く、どのようにして消滅したのかという点についても決定的な結論は出ていない。著者は、アレクサンドリア図書館の消滅は「何世紀にもわたる放置」、「リーダーシップや資金の欠如」、「社会の無関心」に原因があると考えており、この物語は「忍びよる衰退」に対する警鐘を示している、と述べている。

第3章　本が二束三文で売られたころ

ヘンリー８世らによる宗教改革の最中、図書館の運営母体であった修道院や修道会に対して行われた破壊行為と、書物を破壊から守ることになった一連の抵抗について論じられている。その事例として、破壊の「証拠」あるいは失われた知識の貴重な情報源となった、ヘンリー８世に雇われたジョン・リーランドがヨーロッパ中の図書館を周り歩いた記録や、製本材等の用途で再利用された書物などが取りあげられている。

著者は、これらの破壊行為に抵抗した好古家と呼ばれる人々の功績を示し、彼らの情熱とネットワークが、現代のライブラリアンやアーキビストという職業の礎になったと位置づけている。

第4章　学問を救う箱舟

本章では、オックスフォード大学ボドリアン図書館の歴史を振り返り、同館の蔵書や運営方法、方針が後世に与えた影響の大きさを示している。創設者であるトマス・ボドリー卿は、宗教改革における攻撃から生き延びた書物や記録を救い出した。彼は同じ過ちを繰り返さず、より良い図書館を創ることを目的とし、図書館創設にあたり保存やアクセス、資金獲得等について多くの規約や方針を打ち出した。ボドリアン図書館第25代館長である著者は、ボドリーの功績を再評価するとともに、ボドリーの方針が図書館や公文書館における持続可能性やアクセス性の面で一つの参考事例になることを示している。

第5章　征服者の戦利品

本章では、ワシントンにある米国議会図書館の草創期の歴史を辿り、同館がアメリカ国家にとって大きな意味を持ち始めていたこと、また1814年のイギリス軍による同館の焼き討ちがアメリカ国家に与えた損害の大きさを強調している。著者は、この知識への攻撃の目的が相手国の政治と政府の中枢を弱体化させることにあったという点と、古代世界における知識への攻撃との間に共通点を見出している。また、その後の破壊行為への対応に伴う大規模な変革が民主主義に貢献したとも述べている。

第6章　守られなかったカフカの遺志

本章では、個人の遺した文書や記録が破棄された例、さらには故人の遺志に反して保存された例を示しながら、「キュレーション」という行為について論じている。前者の破棄された例として、ヘンリー８世に秘書官として仕えていたトマス・クロムウェルやイングランドの詩人ジョージ・ゴードン・バイロン卿らの文書が挙げられている。これらは、本人や関係者の名誉を守るためという理由から、故人の遺志にしたがって文書が破棄された例である。これらの例と比較して、著者は文学者フランツ・カフカの作品や私的文書を保存した、作家であり彼の親しい友人でもあったマックス・ブロートの功績を取り上げ、彼がカフカの文書を残したことで世にもたらした功績の大きさを評価する。文学作品の「キュレーション」行為は「倫理的に複雑で難しい」と述べる一方、「偉大なる作品」を後世に残す先見の明の必要性を強く訴えている。

第7章　二度焼かれた図書館

本章では、ベルギーのルーヴァン大学図書館の創設から発展、破壊と再生を描き、知識の中心地の破壊がもたらす文化的喪失の悲惨さを訴えている。ルーヴァン大学図書館は、1914年と1940年の二度にわたり、ドイツ軍の攻撃によって破壊された。著者は図書館再建に渦巻く国家の意図、知的・社会的パワーの原動力となる図書館を信じる人々の良心、さらには何度破壊されようとも図書館機能を再創造するルーヴァン大学の力強さを克明に描写している。そして、戦禍によって破壊されたルーヴァン大学図書館は、戦後、世界各国から支援を受け、またドイツに対する国際的な批判もあり、長期的に見れば大きな発展を遂げたとしている。

第8章　紙部隊

本章では、ホロコーストにおける図書館の破壊およびアーカイブズの組織的な没収に対するユダヤ人の抵抗を扱っている。著者はその歴史的経緯を辿ることで、知識の破壊という行為に打ち勝ったユダヤ人の保存への熱意を讃えている。

ナチス占領下のリトアニアのヴィルナ（ヴィリニュス）・ゲットーでは、ユダヤ関連の書物や文書を「没収」するべく、「紙部隊」と呼ばれた３人のユダヤ人識者の監督のもと、ユダヤ人自身によってその選別作業が行なわれた。しかし、彼ら紙部隊をはじめ、多くの

ユダヤ人が危険を顧みず書物や文書を隠し持っていたことで、「数千冊の印刷本と何万もの直筆文書」が戦後に発見されることになる。著者は、ユダヤ人のもとに書物や文書が返還されつつある現状を、破壊に対する保存への熱意の勝利であるとする。

第9章　読まずに燃やして

第６章と同様に、本章でも個人文書の破棄とその影響が論じられている。詩人であり、ライブラリアンでもあったフィリップ・ラーキンの日記は、長年にわたり彼の秘書を務めた人物によって、故人の遺志どおり「読まずに燃や」された。著者は、個人コレクションの価値を訴えていたラーキンの自己矛盾と、謎に包まれた日記の存在が却って彼の作品への関心を高めていることを指摘している。

また、詩人のテッド・ヒューズは、同じく詩人として人気を博した妻シルヴィア・プラスの日記の一部を破棄している。著者は、彼らの決断が容易なものではなかったことを断りつつ、この日記のような文学コレクションが失われることによる文化的損失の大きさを訴えている。その対応策として、「長い目で見ること」、つまり長期の非公開期間を設けることを提案している。

第10章　降り注ぐ砲弾

1992年、サラエボで起こったボスニア・ヘルツェゴビナ国立・大学図書館に対するセルビア人武装勢力の攻撃もまた、文化の抹消を目的としていた。この攻撃では、同国の公文書館の約半分以上が破壊され、膨大な量の歴史的記録が失われた。本章は、イスラム教徒とイスラム文化の一掃を目的としたこの攻撃の悲惨さを伝えるとともに、紛争・弾圧下での「文化の大虐殺」の位置づけをめぐる国際的動向を批判的に振り返る。

さらに近年の例として、著者はスリランカ及びイエメンにおける図書館に対する破壊行為を取り上げ、特定の文化が「虐殺」の対象となり続けていることを訴える。本章の最後では、こうした知識の永久喪失への抵抗として、「ボスニア写本収集プロジェクト」やザイド派の写本をデジタル化する取り組みなど、デジタル技術と複製による保存と普及の試みが示されている。

第11章　帝国の炎

図書館や公文書館のコレクションには、他の地域から略奪された資料や、他国で悪政の証拠隠滅や文化的弾圧のために破棄された資料の中から収集されたものが含まれることがある。著者は、近年盛んに議論されている「本来の場所から移されたアーカイブ」(‘displaced or migrated’ archives）について概観することで、「歴史の掌握」が文化的・政治的アイデンティティに及ぼす影響について論じている。

議論の焦点になっているのは、戦争の最中に略奪され、「戦利品」として持ち去られたコレクションの存在および旧宗主国が旧植民地に残した記録文書の保存場所の問題である。著者は、こうしたアーカイブズの破壊や残された記録の保存先の決定について、判断の主

権が旧植民地側にないことを批判する。

第12章　アーカイブへの執着

世界史上、抑圧的な政治体制下では人々の管理のために詳細な記録がつくられ、利用されてきた。また、そのような経緯で生まれたアーカイブズは、政権の不正を暴く証拠ともなる。本章では、歴史的局面におけるアーカイブズの持つ力と、その功罪について論じている。

まず著者は、東ドイツのシュタージの記録を例にあげ、圧政下における行政記録が後に「崩壊した社会を癒す手段」にもなりうることを指摘している。一方、イラクでは記録の持ち出しによって生じたアーカイブズの破壊が社会の回復を妨げていると指摘する。

さらに、本章では、悪政を暴くという目的のもとに記録文書を国外に持ち出すことの違法性にも言及している。また、これら記録文書の公開に伴う責任の問題として、アーキビストのカナン・マキヤによってハーバード大学の研究グループ「イラク・リサーチ・アンド・ドキュメンテーション・プロジェクト（IRDP）」のウェブサイトで公開された記録文書が、個人情報漏洩の危険性から直後に削除された例を挙げている。

第13章　デジタル情報の氾濫

本章では、現代におけるデジタル化された知識の管理状況を概観し、記録保存の主導権はどこにあるべきかという問題を論じている。著者は、歴史家のティモシー・ガートン・アッシュが提唱した「私的超大国（オンライン上の知識を管理する巨大企業）」という概念を参照し、その活動に否応なく付随してくる信頼性の問題を指摘する。

また著者は、「ウェブ上の知識へのアクセス」を提供する民間の取り組みについて、その持続可能性を疑問視し、ウェブ情報を保存する図書館や公文書館の重要性が高まっているとする。

さらに、大手テクノロジー企業が収集した「見えない」ユーザーデータの将来的なアクセス可能性の低さと、それらのアーカイブ化の必要性を指摘する。最後に著者は、公的機関が個人のデータを預かり、将来にわたって管理していくためには、法的枠組みの整備と個人データの保護システムが必要であると指摘している。

第14章　楽園は失われたのか？

終章となる本章では、著者は「長い歴史のなかで行われてきた知識に対する攻撃と、図書館や公文書館の破壊がコミュニティや社会に与えた影響について伝え」るという本書の目的を今一度強調する。また、そうした記憶機関の破壊の原因となってきた「油断」が現在に至るまで絶え間なく続いている現状にも警鐘を鳴らす。

さらに知識の保存という活動がアーキビストやライブラリアンの個人個人の活動に基づくものであることに言及し、彼らのような専門家を支える財政的基盤の重要性を訴える。著者は、資金調達とデジタル化への対応という困難な仕事に対処する図書館の取り組みの

数々を示しながら、他方で近年、記録を「長期的な目で」見るという態度が失われていることを強く批判し、本章を終えている。

結び　図書館や公文書館はなぜ必要なのか

ここで著者は、図書館や公文書館の本質的な機能について述べている。以下に引用する。

1．社会全体およびそのなかの特定のコミュニティの教育を支える機能。
2．多様な知識や思想を提供する機能。
3．重要な権利の保護と健全な意思決定の奨励を通じ、市民の幸福と開かれた社会の理念を支える機能。
4．真偽の判断が透明性、検証、再現性によってなされるよう、確かな判断基準を提供する機能。
5．社会や文化に帰属する記録文書の保存を通じて、社会が独自の文化的・歴史的アイデンティティを確立するのを助ける機能。

著者は結びで、各章で述べてきた内容を振り返りつつ、記憶機関においてこれらの機能が破壊されてきた歴史と、現在も起こっている破壊行為についてまとめている。そして、長期的視点で文化を捉える記憶機関がないがしろにされることで生じるリスクを再度強く訴え、本書を締め括る。

4　所感

本書において著者は、図書館やアーカイブズが受けてきた攻撃とそれに対する抵抗の歴史を辿ることで、記憶機関の持つ意味や社会的役割について論じている。各章の内容はそれぞれ独立したものであり、基本的に時系列の構成となっている。一方で、はじめにや第14章、結びにもあるように、本書は一貫して「知識への攻撃」という問題を扱っており、各章の内容には関連性がある。著者は、知識の破壊行為の目的として、「歴史の掌握」や「文化の抹消」といったパターンがあるとしている。

また、本書の第２章や第３章、さらに第13章では、記憶機関への無関心や記録保存に対する知識の欠如が記録や文書の劣化という事態を招いているとして、このような「緩慢な破壊」の歴史の一部が明らかにされている。この知識の破壊が意図的なものに限られないという視点は、長期的視座が求められる記録保存の専門家が理解しておくべきものであろう。しかし、惜しむらくはその点に関する記述が少なかったことである。アナログからデジタルへと移行する過渡期に生まれた現代の多様な記録媒体は、非常に脆弱な側面をもつ。こうした記録媒体の保存に対する無関心が、どのような劣化すなわち「破壊」を引き起こしてきたのか、これを歴史的に見直す作業が必要だと評者は考える。

その他にも、第６章および第９章では作家の個人コレクションを題材として扱い、保

存／破棄の選択における私的観点と公的観点の相違とジレンマについて論じられていた。ここで著者は、たとえ直ぐの公開が難しくとも、長期的視点を持って個人コレクションを保存し、その公開を未来に託すという選択肢があることを訴えている。ただ、両章については、やや情報不足に感じられるところもあった。他の文献も合わせて参照すると、より多角的にその内容を見ることができるように思う。

最後に、全体に通底する課題として、記録の破壊や保存の仕方に決定権を持つ者に対する問いかけがあったことを指摘しておきたい。アーキビストは、記録の管理と保存を担い、利用の機会を提供する立場にあるという点で、記録の運命を決め得る職業であることを忘れてはならないと感じた。また著者は、知識の破壊に抵抗した人々を現代のライブラリアンやアーキビストの礎として位置づけたが、果たして現代に生きる我々は、同じ状況に置かれた際、そのような「破壊」に対して毅然とした態度を保てるだろうか。最近では、パレスチナのガザ地区で壮絶な知識の破壊行為が行われている[3)]。破壊の歴史が繰り返される今、この問いについて、我々は再度自問すべきではないだろうか。

3――International Council on Archives, “Statement of the International Council on Archives on the Destruction of the Central Archives of the Municipality of Gaza”, 2023/12/13（https://www.ica.org/en/statement-of-the-international-council-on-archives-on-the-destruction-of-the-central-archives-of-the, 最終アクセス日：2023/12/19）国際アーカイブズ評議会は、ガザの中央アーカイブズと主要公共図書館に対する爆撃によって100年前の歴史的文書が破壊されたことを受け、文書および文化遺産の破壊を行わないことを強く求めるとした。